

「おねしょ」と「夜尿症」

生まれて2歳ごろまでの子どもは毎晩おねしょをしますが、その頻度は年齢とともに減っていきます。おしっこをしたいと感じるセンサーの未熟性が関係しているようです。昼間も失敗する重症例も散見されます。

乳幼児期の夜尿を「おねしょ」といいますが、5歳以降で月1回以上のおねしょが3か月以上続くものは「夜尿症」と定義されています。単なる「夜尿」ではなく「症」という漢字が付け足されています。

夜尿症にたいしては生活改善や薬物治療が必要となります。治療後、半年までに約80%の子どもで症状が軽快したという報告があり、治療後2年で治癒した子どもは75%以上と報告されています。早めに治療することで治癒率が高いという報告もあります。

夜尿症のために子どもが自信をなくし、心理面や社会面、生活面に影響を及ぼすこともあります。楽しいはずの宿泊学習が辛い経験となってしまうでしょう。お母様から「この子はおねしょをしても平気な顔をしている、全く気にしていません」とのお話を伺うことがあります。しかし、本人は失望感を感じているはずです。

精神的な影響がストレスになって、夜尿を長引かせてしまうこともありますので、小児科や泌尿器科などへの受診をお勧めします。また、経過を見るにしても、腎臓や内分泌疾患などの疾患が潜んでいないかを調べる必要があります。

おねしょをしたい子どもはいません。少しでも早くおねしょから卒業するためには、約束が守れた時やおねしょがなかった日はしっかりと褒めてあげてください。